

---

# クローバー・2

桜川四葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クローバー・2

### 【Nコード】

N4884P

### 【作者名】

桜川四葉

### 【あらすじ】

性別を偽り学校に通う2人の生徒。優紀（女）と楓（男）。

前作「クローバー」で付き合うことになったその後のお話…

学祭や旅行で距離は縮まったと思ったのに…

新キャラ登場でまさかの三角関係！？

2人の恋はどうなるのか？

- 約束 -

朝。目覚しより少し早く目が覚めたあたしは、ベットの中で昨日の事を思い返していた

昨日のデートであたしと楓は付き合うことになった。

まだ、信じられない…

夜、帰宅すると楓からメールが来たけどすぐに会いたくなつた…

そういえば、楓とのデートから帰るとお兄ちゃんが玄関で待っていた。

あたしの服装から異変に気づいていたのだ。

お兄ちゃんには隠し事しなくなつたから素直に話したけど…いろんな意味で驚いてた（笑

あたしが幸せならって反対はしなかったけど、「優紀を泣かせたら絶対許さないっ！」ってさ。

たまに過保護過ぎ！って思うこともあるけど、心配してくれてるってわかってるからそんなにイヤじゃない。

あたしってブラコンなのかな？笑

「優紀ー？そろそろ起きろー！」

いけない！昨日のこと思い出してたらいつの間にか起きる時間過ぎてた！！

「うん！今行くー！」

あたしは急いでリビングに向かった…

朝は、お兄ちゃんがご飯を作ってくれる。1人暮らしが長いから料理は上手いんだ。

…で、あたしは夜の当番

「いったきまーす。…うん。今日もおいしゅ」

「それはどーも…」

ん？お兄ちゃんが何か言いたそうな感じ…

きつと楓とのことかな？

「お兄ちゃんどうしたの？」

「ああ…あのさ、優紀…楓君とのこと認めただけどやっぱり女ってことばれるのはまずいから、学校ではうまくやれよ…」

やっぱり心配してたんだ…お兄ちゃん優しいな。

「わかってるよ。楓とも約束したし…学校では今までどおりにするから。約束する…」

あたしはお兄ちゃんと指きりした。指きりなんて子供の時以来だな…

お兄ちゃんの為にもばれないように気をつけなきゃ！！

・約束・（後書き）

前作「クローバー」の続きになります。

今回は作品ができ次第、随時UPになります。

なるべく早くUPできるように頑張りたいので、飽きずに最後までお付き合いいただけたらうれしいです。

- 秘密 -

いつもより早く学校に着いた。

きつと、いつの間にか早足になってたみたいだ…

「…楓、来てるかな？」

早く会いたい…

でも、ばれないようにしなきゃ…

葛藤と闘いながら、教室に向かった。

教室に入ると楓はまだ来てない様子だった。

「だよね…。」

あたしは席に座りいつもの真面目な副会長として本を読み始めた。

しばらく経つと…隣に気配を感じた。

楓だ!!

あたしが顔をあげるとそこには…やっぱり楓がいた…

「優紀君おはよー!」

女の子の姿をした楓。でも、先週末までとは違う…あたしの彼氏なん

だ…／／／

「お、おはよう！上木さん…」

普通なあいさつをしたつもりだったのに…

楓が席に座ると小声で「優紀、女の子の顔してる！…！ばれちゃうよ」  
って…恥ずかしい…／／／

でも、やっぱり付き合ってるんだって実感できた。

楓が来るとすぐに人が集まりだした。

おかげであたしと楓の学校での接点は少ない。

だからばれる事はなさそうだけど、ちょっと寂しいな…

智もあいかわらず学校来るなり楓のところだし。

そういえば、楓と付き合うことになって智への気持ちは恋じゃなかったって気付いた…

あえていうなら、女の子の気持ちを忘れないために恋だと思ったのかも。

あたしはお兄ちゃんとの約束の為に、学校での楓との会話は事務的な感じだけにした。

授業中、たまに楓からくだらないメールが届いたけど（笑

それに…家に帰れば電話もできるし、休みの日はよく楓と出かけて  
たから学校でのことは我慢できた。

楓があんなことを考えてるとは全然思いもしなかった…

（楓サイド）

付き合うことになった。俺ら。

でもあの日の約束通り、学校での関係は『上木さんと副会長』のま  
まだった。

俺がたまにメールを送ると優紀は楽しそうに笑っていた。

まっ、ばれないようにだからすぐ戻っちゃうんだけど…

それでも嬉しかった。優紀の笑顔が見れるなら。

こんな日常がしばらく続いた。

ふと思った。俺はやっぱりわがままらしい…

学校ではただのクラスメート。そうするって決めたのに…

…学校でも優紀の近くにいたい…と思うようになっていた…

俺の最近の悩みだ！！

ある日、生徒会長の智から面白い話を聞いた♪

来月『文化祭』があるらしい。

さらに？生徒会も学祭を楽しめるようにって生徒会顧問の桜川先生の提案で役員も必ず1日はフリーの日を設けるように決まったらしい！！

「桜川先生！サンキュー！」俺は心から感謝した！

ちなみに、俺がこの話を聞いたのは智から「空きの日に一緒に回らないか？」って誘われたからなんだけどね。

そんなことより俺の頭には優紀と回ることしかなかった！！

・学祭？・

学祭2日目。

あたしは今まで生きてきた中で一番緊張していた…

それにはこんな理由があった…

生徒会顧問をしているお兄ちゃんの提案で決まった『学祭』での生徒会役員の1日フリー制度。

毎年、生徒会は実行委員として学祭の運営で大忙しだった。

今年もそうだと思ってたのに…お兄ちゃん職権乱用するんだもん！！

話を聞くとあたしのことを思ってたらしいけど…にしてもやり過ぎでしょ！！

…でこの話をいち早く聞きつけた楓が「一緒にまわろっ」って言うてくれたんだけどばれずに回るってどうするつもりなのかな？？

楓は準備があるとかで後から連絡するって言ってたんだけど…

とりあえず、楓から連絡が来るのを待つ間に1度生徒会室に顔を出した…

「おはよーございます…」

静かにドアを開けると中には智がいた。

「あれ？優紀じゃん！？今日フリーの日じゃなかったけ？？」

智が不思議そうな顔をしている…

だよ。他の人はせつかくのフリーの日にこんなところに顔なんてださないよね…

「ちよつとね。友達からの連絡待ちで…」

「そうなんだ。でも、優紀が友達とってなんか珍しいね！俺以外とあんまつるまないじゃん？」

「まあそうなんだけど…なんか俺フリーの日あるって言ったら地元  
の奴が来るっていうからさ…」

嘘ついちゃった…すでに『男装』してる時点で嘘ついてるけどやっ  
ぱ苦手だな…

それにちよつと微妙な嘘だった気がするし。変に思ったかな？

…それはあたしの考えすぎだったみたい。

智は普通に信じてるっぽい（笑

「あっ！！そーいやさ…今日のミスコン『楓ちゃん』出ないんだっ

て…」

「えっ！？そ、そうなの…？」

び、びつくりした…一瞬ばれたのかと

「俺、めっちゃ楽しみにしてたのになぁ。それに、みんなからの推薦で俺、出ることになったから優勝したら一緒に写真とれたのに…」

優勝って…まあ、確かに智も楓も美男美女だしね。

でも本当に残念そうな智みてたら楓と一緒に回るようになってるあたしが申し訳ない気がしてきた…

「…くくく」

携帯が鳴った！楓からメールだ！！

『今からいつもの公園に来て！』

「なんで公園？」学祭回るはずなのに…とりあえず謎は残ったままだけど公園に向かうことにした。

「じゃ、智。俺行くから今日のことはまかせたぞ…！」

「おお！まかされた…！」

あたしは急いで楓の待つ公園に向かった。

やっぱり学祭ってこともあって校外にも人はいっぱいいた。

幸い生徒は準備等ですでに学校にいるから誰にも見つからなかったけど・・・

「優紀——！！」

公園に入ると楓の声がした！声のした方には

「えっ！？」

あたしは目を疑った。そこには…

私服の楓が…

「なんで??」あたしの頭は混乱していた。

「ちよっ、ちよっと！！楓どいうこと！？」

あたしは楓に詰め寄るように聞いた！

「やっぱ。驚いた？」

楓は楽しそうに笑ってる！って笑ってる場合じゃないよ——！！

これじゃ楓が男だってばれるじゃん——！！

「驚いたじゃないよ——！説明して——！！」

あたしはなにかば叫ぶような感じになっていた。

「まあまあ。優紀落ち着きなつて。それに考えてみなよ！俺は学校だと『女』って思われてるし、それに普段はウィッグもしてるから男の格好してたつて誰も気づかないよ！それに俺体調不良で寝込んでることになつてるし、気付かれそうでも似た人は世界に3人いるつていうじゃん！勘違いだつて思つてくれるよ」

楓つて実はバカ？あたしは声も出なかった…

「おーい？優紀ー？」

はあ。でも、楓なりに一生懸命考えてくれたんだよね…

「わかつたよ。楓。」

「ホントー！わかつてくれたならそれでよしっ！ーじゃあ…次は優紀だね！」

「へっ！？あたし？」

また、楓が変なこと言い出した…

「俺の作戦はね…聞いて驚くなよー！優紀も女の子の格好して普通にカップルとして回ることー！どう？いい考えじゃない？」

「……つつっ！？」

驚くをこえて呆れるだよ…

でも、今日の楓の様子からだと言つても聞きそうがない…

諦めたあたしは楓の話にのった

「…ふう。仕方ない今日だけだからね!!」

「サンキュ！優紀、じゃ着替えに優紀んちに行こうか！」

それにあたしの方が楓よりはばれなさそうだしね…

てな訳で、あたしは着替えを済ませ楓と2人で学祭に来ているわけだが…

ばれないってわかっててもやっぱり緊張する。

知ってる人が通り過ぎるだけであたしの心臓は持たない気がした…

これがあたしが緊張してた理由だ…

・学祭？・

初めは緊張してたあたしだけど回ってるうちに気にならなくなってきた…

楓とこうして学校にいられるなんて思っても見なかったし。

きつと普通に出会ってたらこんな感じだったんだろうな…

「すみません！！」

後ろからいきなり声をかけられた！

振り向くとそこには…生徒会の１年生の子だ！！

「ヤバイ！」あたしはとつさに下を向いた…

それを察知した楓が

「え〜と？なんですか？」

「いきなりすみません。実は午後から行われるミス&ミスターコンテストの一般参加者を探してたんですが…よかったらお２人に出ただけないかと思ひまして声をおかけしました。」

「本当ですか！？」

「えっ！？」楓なんか嬉しそうなんだけど…

ま、まさか！？

「俺達でよかつたら出ます！どこに行けばいいですか？」

「ありがとうございます！！じゃあ2時に体育館に来てください。生徒会に声をかけていただければ後は大丈夫ですから！それでは、失礼します。」

「あつ！ま、待って…」

あたしが言い終わるより先に楓に口をふさがれてしまった。

「んううゝ！！」

役員が見えなくなるとやっと楓は離してくれた。

「ふはあ。楓！！なんで引き受けるの！！」

ちよつと怒り気味に聞いた！

「だって…学祭といえばミスコンじゃん…それに俺の優紀をみんなに見せたかったんだもん！」

「…っ／／／」

また、楓は…

今日は楓に振り回されてる気がする…

午後2時。

あたしたちは言われた通り体育館に来た。

「すみません。役員の人にミスコンの件で誘われたんですけど…」

「ああ、聞いていますよ！こちらへどうぞ！」

準備があるとかであたしと楓は別々の場所に案内された。

あたしの他に一般参加の人は5人くらい…やっぱりみんなキレイだ。

あとは各クラスの代表。あたしのクラスの子もいる。本当は楓だったんだけど…

この高校のミス&ミスターコンは『ファッションショー』形式でプロにスタイリスト&メイクをしてもらってドレスアップをしてステージを1周する。

最初は男子からで…次に女子。で投票で1位を決めて記念撮影で終わりなんだけど…

音楽とともに学祭恒例の『ミス&ミスターコンテスト』が始まった！

出場者の登場で会場は大盛り上がりだ！！

次々に出場者が登場し会場もヒートアップしている！！

……

「次は…我が校の生徒会長も務めます、智くんです！！」

智の名前が出ただけで会場から女子の声援が半端ない！

さすが学校1のイケメン（笑

……

「そして最後は、一般参加の『翔』くんです！」

あっ！楓だ。

さすがに本名はまずいからって偽名にしたんだけどやっぱりつけるなあ。

ちなみにあたしは「優美」理由はないんだけど、思いついたのがこれしかなかった…

紹介とともに楓がステージに出た瞬間、会場がざわめき始めた…

気になったあたしはステージの袖からのぞいた

そこには…

芸能人並みの美形男子が…

「うそっ…。」

あたしは楓のその姿から目が離せなかった…

元々かつこいいのは知ってたけど…プロの手にかかるここまでの…

会場もその美形ぶりに驚いてるようだ。

そして…音楽の曲調が変わった瞬間、ざわめきが歓声に変わった!!

男子の中で1番の大盛り上がりだ!!

しかも、楓めっちゃ楽しそうだし。若干慣れてる感がするのは気のせい…?

見とれている間に楓の出番は終わってしまった。

次は女子の番だ。

あたしは最後から2番目。着慣れないドレスだけど楓気に入ってくれるかな?

女子もどんどん進んでいく。

こんなこと慣れていないあたしは緊張しまくりだった…

いよいよあたしの番…

……

「では、次は一般参加の『優美』さんです。なんと、先ほど出演していただいた『翔』くんの彼女さんです！」

えっ！？ちよつと、MC！それはないんじゃない！？

そんなこと言ったら会場からブーイングだよ…

出にくい空気を作ったMCを恨みながらあたしはステージに出た…

やっぱり…MCのせいで微妙な空気が流れていた。特に女子からの視線が痛い…

「やっぱり、やめればよかった…」

ぼそつと言った瞬間。あたしにスポットライトが当たりいっせいにみんなあたしを見た…

「うそっ！？」

「やばくない！？」

……

会場から話声が聞こえる…

「うう。やっぱり…いやだ帰りたい…」

そう思った次の瞬間。

音楽とともに会場が湧きあがった！！

「えっ！？」

あたしには何が起こったか分らなかった。

わからないままとりあえずステージを1周して戻ると、楓と目が合った！

口パクで何か言ってる…

「キ…レ…イ…だ…よ！？」

あたしは恥ずかしくなって急いで指定された場所へ移動した。

でも、あの会場の反応が気になる…

全員が終わると1度出演者はステージ裏に戻った。この間に投票が行われる…

あたしは急いで楓のところに向かった！！

楓を見つけるなりあたしは言った…

「楓！あたしやっぱり出なきゃよかった…」

だって、あんなかつこいい楓の彼女だって言われて…

きつと批判されてるに決まってる…

「…そうだな。出さなきゃよかった…。」

「やっぱり…」

楓もそう思ったんだ…ちょっと悲しくなった…

「だって、優紀かわいすぎ／＼会場だって優紀出た時、驚いてたじゃん！―！」

「えっ！？さっきのは…」

あたしは訳がわからなかった…だって、だって…

「あれは、優紀がかわいすぎたからだよ。だって、俺が出た時以上に盛り上がったじゃん！ねっ！」

楓は、そう言った。

楓がそう言ってくれるならって思ったけど…

それでもあたしにはまだ信じられなかった。

「出演者のみなさん集まってください！」

スタッフから声がかかった。

「結果ができました。3位から順に呼びますので呼ばれたら男女の同じ順位の方とペアでステージに上がってください!!」

あたしは呼ばれるはずないって思ってたから気楽に待っていた。

「それでは、1位の発表です!!」

ドラムロールの終わりと同時に名前が読み上げられた

「今年のミスターは…一般参加の「翔」くんです!!」

会場が盛り上がった!!

やっぱりね。さすが楓だ。

「おめでとう!!」って言おうとしたあたしの唇に楓は人差し指を当てた。

するとすぐに女子の発表が始まった…

「続いて、ミスの発表です。」

また、ドラムロールが鳴った。

そして…

「今年のミスは、なんと…同じく一般参加の「優美」さんに決定いたしました!!」

「えっ!？」

あたしは思わず声に出してしまった。

「だから、言ったでしょ。優紀がかわいすぎたんだって」

楓は当然!とばかりにあたしの手を取りあたしをリードしてステージに連れて行ってくれた。

その後のことはよく覚えていない…

少しインタビューがあっただけど何言っただかもわからないし…

たしか…楓がいろいろ答えてくれてた気がする…

それから楓とのツーショットを撮って、最後に出演者全員で記念撮影をしたはず…

なんか夢みたいだったな…

そんなこんなで『学祭デート』は幕を閉じた…

家に帰ってから「ミスコン」をたまたま見学していたお兄ちゃんにすごく怒られたけど…

それでも楽しかったって思える。

楓に感謝しなきゃね！！

く楓サイドく

「くくくく」

携帯が鳴った。優紀からのメールだ！

『楓のバーカ！！…でも、ありがとう。楽しかった。』

「バカってひどっ！（笑）」

俺は、ミスコンでの優紀を思い出した。

「まぢ、かわいかったな…」

思い切って出場してよかった。

学校の奴らに俺は優紀と付き合ってるんだって言えた気がした。

あくまで俺の勝手な思い込みだけど…

それに優紀は自分が美人だって思っていないみたいだから、それに気づいてくれたらいいんだけど。

あの、名前呼ばれた時の顔なんか、傑作だったな！かなり驚いてたもんなあ

それも優紀のいいところなんだけどさ。

そういえば！！優勝の商品で温泉旅行もらったんだった。

今度は、優紀と旅行の計画立てよ。

- 夏休み -

ちよつとした進学校である葉山学園は夏休みのほとんどが夏期講習で埋まっていた…

それに生徒会のあたしは講習が終わってもほとんどを学校で過ごしていた。

だから最近楓に会っていない。

むしろ、夏休みじゃない時の方が楓に会えてた気がするんだけど…

楓からは毎日『つまらない…優紀に会いたいって…』ってメールがくる…

「あたしだって…会いたいよ…」

そんなことを考えながら仕事を片付けてただけで、

ふと思い出した。

「そういえば…!」

ずっと楓から旅行に誘われていたんだ…ミスコンの賞品でペア温泉旅行もらってたんだよね…

2人つきりでお泊まりなんて恥ずかしいし、生徒会あるからって迷ってたんだけどせっかくの夏休みだし…行くことにしようかな？

仕事も順調に進んでるから予定より早く終わりそうだし。

それに…あたしもそろそろ充電切れ。（笑

そう思ったらすぐに楓に連絡したくなった。喜ぶだろうな！

「くくく 優紀!？」

「あつ楓？」

「どうしたの!??この時間に電話くれるなんて珍しいね!??学校じゃないの?」

「そうだよー。えへへ…実はね。楓に早く知らせたいことがあつてさ!」

「えっ!??まぢ?なにになに??」

「聞いて驚け!楓!旅行いこう」

「…え!??うつそまぢで??いいの優紀?」

「うん!生徒会の仕事思ったより早く終わりそうだし夏休みの思い出作りたいじゃん。来週あいてる?」

「もちろん!空いてなくても空けるに決まってる!!!まぢうれしい。ありがとう」

「よかった。喜んでくれて…旅行楽しみだね」

「うん！じゃ俺、予約とかしとくから優紀は生徒会頑張れよ！！」

「わかった。じゃあ楓またね！」

「じゃあまた。」

えへへ…楓すっごい喜んだ。

やっぱりメールじゃなくて電話にしてよかった。

そうと決まったら残りの仕事ちゃっちゃとやっちゃいますか♪

（楓サイド）

ピッ！

「どうしよ。今の電話嘘じゃないよな！？」

夏休みはもう思い出作れないと諦めてた俺は今めっちゃうれしい。

俺。泣くかも…

しかも、優紀と初の泊まりがけの旅行だ！

「俺、大丈夫かな？」ちょっと不安もあったけど、

それより優紀とずっと一緒にいられることが嬉しかった！！

- 旅行 -

「うわぁー！きれーい！！」

あたしたちは電車で旅行先に向かっていた。

その電車の窓から見える真夏の海！！

太陽の光を反射してキラキラ光っててすごいキレイ…

「優紀！次の駅で降りるよ。」

「うん。」

なんか、いつもと違うシチュエーションにあたしのテンションはMAX！！（笑

今回は1泊2日で楓とちょっと進展できるかもって思ってた…  
／／

「今日の優紀、いつも以上に元気だね！」

「だって楓とずっと一緒にいられるんだもん！」

「…っ／／…。」

「どうしたの楓！？」

「なんでもない…」

楓の様子はちょっとおかしかったけどあたしは一緒にいられることが嬉しくてそんな気にしていなかった…

「着いたー!!」

宿の予約の時間までまだあるから大きな荷物だけ預けてその辺を散策することにした!

さつき電車の窓から見えてたけどやっぱり近くにはきれいな海があった。

水着持ってきてよかった♪

「ねえ。楓。明日はあの海に泳ぎに行こうね!」

「そうだな…」

「…?」

やっぱり、いつもの楓じゃない。どこか上の空って感じ…

一通り散策を終えると日も傾き始め予約していた時間になっていた。

あたしたちは予約していた宿に来ていた…

楓がフロントで手続きをしてくれている間あたしは宿の大きな窓か

ら見える海を見ていた。

「すごい…」

夜景も見え始め、思わずため息が出る…

「優紀。行くよ!!」

「…!?!」

思わずその景色に見入ってしまったあたしは楓の声に驚いてしまった。

「うん!」

あたしたちは部屋に案内された…

「こちらが、上木様のお部屋になります。何かありましたらフロントまでご連絡ください。ごつゆくりとどうぞ。」

そう言つて仲居さんは部屋を出て行った。

ん?あたしの部屋は?

「えっ!?!まさか?」

あたしは楓の顔を見た…

楓は少し言いくそうに…

「実は…あのペア旅行券、カップルにつてことらしく1部屋分だったんだ…だから…もし、イヤなら俺寝るときは離れて寝るから…」

さっきまでの楓の反応の理由がわかった…

それに、あたし生徒会だったのにそこまで知らなかった。

でも、せつかくの旅行だし…あたしだって…

「楓…離れて寝るなんて寂しいよ…／／／」

「…っ！！優紀、そんなかわいいことばっか言っなよ…さっきだつて…」

「…えっ！？」

「な、なんでもない…でも、俺…優紀と2人つきりで理性保てる自信ないよ…」

「…っ／／／」

あたしは戸惑ってしまった。

楓の気持ちはわかっていたつもりだけどはつきり言われると恥ずかしい。

「あたしは…楓ならいいよ…／／／」

あたしの精一杯の勇気だった。

「…つまぢ／＼／？」

「ほんと。あたし楓には嘘つかないもん…」

たぶん、あたしたちお互い顔真つ赤なんだろうな…恥ずかしくて顔は見れないけど…

ふいに後ろから抱きしめられた…

「ありがとう…でも、優紀に素直に話したら少し落ち着いた。俺、優紀のこと大事にしたいから…今日はしない…」

「わかった…あたしも、楓の気持ち気持ち聞けてうれしい…」

人を好きになるってこんなにも嬉しいことなんだね…

出会いは最悪だったけど、今は楓に出会えて本当に良かったと思う。

「…楓。」

「んっ？」

「大好きだよっ／＼／」

「…っ／＼／…俺も、優紀の事、大好きだよ…」

楓の抱きしめる力が少し強くなった。

そしてキスをした…

それから、あたしたちは宿のおいしい晩ご飯を食べ、目的の温泉にもゆつくり入れた…

夏休みの疲れが全部取れちゃったみたいな感じがする。

そして、あたしたちは一緒に布団で眠りについた。

こんな幸せな気持ちになったのは初めてだよ…楓…

〈楓サイド〉

温泉につかりながら俺は考え事をしていた。

「焦りすぎだったな…」

宿の予約をしたときに1部屋だつて聞いていた。

それを優紀に言ったら断られる気がして言えなかった…

けど、最初から優紀には素直に話せばよかったな。

「まさか、優紀があんなこと言ってくれると思わなかったし…／＼」

だからなおさら優紀のことは大事にしたいからって思えた。

それに、優紀に手だしたら桜川先生に殺されちゃいそうな気がする。  
冗談だけど…（笑）

でも。それくらい優紀の事を大事にしてるの知ってるから俺はちゃんとしたい。

高校を卒業したら俺は優紀と結婚するつもりだ…

気が早いかもしれないけど…俺は本気だ…

そんなことを考えてたらのぼせそうになり俺は慌ててあがった。

・再会・

旅行2日目。

あたしたちは昨日見たあの海に来ていた。

「やっぱり、きれいだねー!!」

「だな!!それに、優紀の初水着、超かわいいし!!」

「もう!見ないでよっ／＼／」

今日の楓はいつもの楓だ。

昨日あんなことがあったからまだちょっと照れくさいけど、今までより楓との距離は近くなった気がする。

ビーチに着くとたくさんの人がいた。

ちょっと楓から目を離すとはぐれちゃいそうだし…

すると、楓がさりげなく手をつないでくれた

「優紀、目離すと他の男に声かけられそうだから…／＼／」

楓の顔真っ赤じゃん。でも、やっぱり優しいね。

あたしたちは、場所を決め海で遊ぶことにした!!

普段着やせして見えてたのか、

水着姿の楓は思ったよりたくましく思わず目をそらしてしまった…

「ふう〜。疲れた〜ちょっと休憩！」

「だな。俺、何か買ってくるけど何がいい?？」

「なんでもいいよ〜!!」

「オッケー!じゃ適当に買ってくるから優紀は休んでて!!」

「うん!」

そう言って楓は海の家に向かって行つた。

目をつむると波の音と海で遊ぶ人たちの声が聞こえてくる…

夏休みが終わればまた「副会長と上木さん」に戻ってしまう。

やっぱり、楓との距離が近くなると学校での関係がイヤになる…

あたしだって楓と話したい…

友達として楓と話すようにしようかな?

別に付き合つてるとかじゃなく、普通に友達みたいに…

そんなことを考えてたら、いきなり声をかけられた！！

「もしかして…優紀！？」

「えっ！？」

なぜか聞き覚えのあるその声…

あたしはその声の方を見た。

「……！！……うそ……！！まさか蓮（れん）？」

そこにいたのは、幼馴染の蓮だった。

中学でいじめられてた時も蓮だけはあたしの味方だった…

でも、あたしがこっちに来てから地元に帰ることがなかったからたまにするメールでのやりとりだけだった…

「やっぱり、優紀だー！！こんなところで会えるとは思ってなかったよー！！」

「あたしも…どうしてここに？」

「ああ、高校のダチと夏休みだから遊びに来た！！優紀は？」

「あたしは…彼氏とね！」

ちよつとためらったけど、蓮とは兄弟みたいに育ってきたから話さなきゃ！って思った。

「…っえ！？優紀、彼氏いんの…？」

「うん。」

「まちかよ…優紀、男として入学するって聞いてたから、俺、安心してたのに…」

「…？」

蓮はなにか言つてたみたいだけどよく聞こえなかった…

「優紀！じゃあ俺いくわ。また、近いうちにな！」

そつ言い残して蓮は去つて行つた…

「近いうち…？」

最後の一言が引つ掛かったけど、深い意味はないと思って気にしなかった…

蓮がいなくなつてすぐに楓が走ってきた！！

「優紀、さっき話してたやつ誰！？」

「えっ？ああ、幼馴染だよ！！蓮って言っただけだよ！まさかここで会えるとは思わなかったからビックリだよ！」

「幼馴染？そつかあ、ナンパされてると思って俺走ってきたよ！！」  
かなり息が乱れてる…本当に心配してくれたんだ…

「心配してくれたんだ…ありがと楓。でも、あたし楓以外に興味ないから（笑）」

「あの、幼馴染も？」

「もちろん！てか、楓もしかして、やきもち？」

「っバカ！ちげーよ！俺はただ心配で…／／／」

うれしいな！楓は違うって言うてるけどだぶんやきもち妬いてくれたんだ。

大丈夫だよ。あたしは本当に楓以外興味ないから！！

あたしたちは楓が買ってきてくれた焼きそばを食べながら、連のことを話した。

「昔の優紀を知っててずるい」とかちよつとふくれてたけどそういう対象じゃないって言ったら少し安心したみたい。

午後、少し海で遊んで、お兄ちゃんへのおみやげを買って家に帰った。

はしゃぎすぎたあたしたちは帰りの電車の中でいつの間にか眠ってたみたいで危なく終点まで行くところだった…

・新学期・

夏休みはあっという間に終わってしまった…

思い出といえば楓と2人で行った旅行くらい。

でも、忘れられないくらいいい思い出。

それにね…楓とあの旅行の帰りに決めたことがあるんだ！

「あつ、おはよー。優紀君。」

「おはよう。楓さん。」

つて、この会話からわかるかなあ？

つまり、付き合ってるってことは言えないけど、友達として仲良くなったってことにすることに決めたんだ。

だから、学校での会話も普通にするんだ。」

「優紀君、夏休みの宿題終わってる？」

「もちろん、全部。楓さんは？」

「まだ…だから、数学貸してくんない？」

「しかたないなあ、いいけど、提出前には返してね！-」

やっぱ、楓と普通に話せるって幸せ。

でも、他のクラスメイトはすごい驚いてる感じ（笑）  
しかも、みんなの会話聞こえてるからね！

「おい！副会長が楓ちゃんと仲良く話してるぞ！」

「まじ！？」

「まじだよ！しかも、あの副会長が笑ってる！？」

「楓ちゃんマジックか？？」

「っておい。あたしだってそりや笑うよ。」

しかも、『楓マジック』ってなんだよ！って心の中で突っ込みいれてみたり…

楓も、横で笑いこらえてるし！！もう～

そのとき…

「あつれ～、意外な組み合わせだね！？」

「あつ！おはよう、智」

「おはよー智君」

「いつの間に仲良くなっちゃったの？俺さみしいなあ…」

そういえば、智、楓のこと好きだったんだよね…

「実はね、夏休みにバイトしてたら優紀君がたまたまお店に来て、それから仲良くなったんだ！」

ナイス！楓。

「そうそう。だから！」

「ふう〜ん。だったら、優紀、俺も誘ってくれたらよかったのに！」

「ごめん。ごめん。」

「まだ、バイトしてんの？してんなら俺行こうかな？」

「もうやめちゃったんだ。夏休み限定でさ！」

「そつかあ。残念…」

智、本当に残念そうだし…

そっぴや、楓、夏休みの間、智から何度か誘われたって言ってたもんな。

智には本当の事言った方がいいんじゃないかな？って最近思う。

あとで、楓と相談しよー！！

なんて、話してたら先生が入ってきた…

「おまえら、元気だったか？先生に会えなくて寂しかったろ！」

「ないない！」（全員）

「おまえら〜先生泣いちゃうぞー！」

相変わらずのクラスだな。なんて、思う。

最近なんだか居心地がいい気がしてきたし…

楓がいるのもそうだけど、クラスのみんなと打ち解けてきた気がする…

でも、女ってことは言えないからあんまり仲良くなっちゃいけないんだよね…

「今日は、また、転入生を紹介するぞー！入ってこい！」

この時期に転入生なんて珍しい。

しかも、1年に2度も。それに、どうしてこのクラスばっか…

「…えっ!？」

あたしは思わず声を出してしまった…

楓が驚いてこつちを振り返った。って楓だけじゃないクラス全員が！

「なんだ、優紀！知り合いか？」

「あつ、いえ…その…」

まずい…

「まあ、まずは自己紹介してもらおうか！」

その、転入生はあたしの方を見て…

「はい、楠木蓮（くすのきれん）です！よろしくお願いします。実は、優紀とは小さいころから幼馴染なんです。親の転勤でたまたまこちらに来ることになったので、驚かそうと思って優紀には内緒にしました！」

「なんだ、そういうことが先生もビックリだな！！ハハハ！」

蓮…聞いてないよ…

しかも、親の転勤なんて嘘でしょ！

親、地元で会社経営してんじゃない…

何考えてるの！？

あたしは、頭の中で必死にいろんなことを考えていたらしく百面相をしてたみたい…

「優紀君？顔すごいことになってるよ！」

あたしは楓の声で我に戻った。

「あつ！ありがとう楓…さん」

危ない！思わず呼び捨てにするとこだった…

「じゃあ、副会長！楠木の知り合いならまたお前に面倒係頼むな！」

「あつ！はい…」

とりあえず、蓮に話を聞かなきゃ！！

授業中、楓からメールが届いた。

『あいつについて聞きたいから昼に屋上で待ってる。』

あたしも、すぐに楓と話したかったけどまずは蓮と話をしなきゃと思っ…

『昼は蓮と話してくる。今日、帰ったらあたしと楓の家の間の公園で待ち合わせしよ！』

『わかった。あいつには気をつけろよ…』

『うん。蓮はただの幼馴染だし大丈夫だよ！』

この時のあたしはそう思っていた…

く 楓サイドく

授業中のメールのやり取り…

優紀、わかってんのかな？

あいつ、蓮は絶対優紀を追いかけてきたに違いない！

あいつからは俺と同類の臭いがする。

せつかく、優紀と上手くいき始めたのに邪魔かよ…

昼。うまく、話し合いが出来ればいいけど…

- 昼休み? -

「蓮!」

「な〜に? 優紀?」

「ちょっと、来て!」

昼休みあたしは蓮を連れ出した。

楓は少し心配そうな顔をしていたけど…ただ話を聞くだけだし大丈夫だよ!

話をする場所に生徒会室を選んだ。

幸い誰もいないようだ…

「…で、なんで転校なんかしたの?」

あたしは少し怒り気味に聞いた。

「なんでって、優紀がこっちで男なんか作ってるからだろ!」

「はあ?」

「俺、優紀のことずっと好きだったんだよ! 中学の事あって告白する感じじゃなかったし…それに男として入学するって聞いてたから安心してたのにな!」

「…！？／／／」

今、なんておっしやいました？

蓮が、あたしの事好き？

いままで、ほとんど兄弟みたいに育ってきたのに…

「優紀が俺の事男として見てないのは知ってたけど、それでも自分の気持ちは伝えたかった！それに、なにもしてないのにふられたなんて納得いかない！優紀の彼氏ってこの学校の奴なのか？」

やばい！楓が女装してることに知らないんだった。

それにはれたら楓が退学にさせられちゃう…

どうしよ…

「何？答えられないってことは何か事情でもあるの！？」

「そんなわけないじゃん！ただ…この学校の人じゃないってことだよ…」

「優紀、嘘ついてるね？」

「えっ！？」

「優紀、嘘つくとき俺の目いつも見ないもんね。何年、幼馴染やっ  
てると思ってんの？」

「それは、蓮がそう思ってるだけでしょ！嘘なんてついてない！」

「そう。言えないならそれでいいんだけど、でも、俺、優紀の事本気だから！これから優紀にめちゃくちゃアタックするから！」

「えっ…／／／」

「それに、彼氏この学校じゃないなら俺にもチャンスあるってことでしょ？」

「ええー！！」

なんか話しおかしなことになっちゃった…

楓になんていったらいいんだろう？

それに、蓮があたしのこと好きって…

「話はそれだけでしょ？って、ことで今日から一緒に帰ろうね！待ってるから！じゃあ」

「ま、待って…」

ああ、行っちゃった…

とりあえずもう一度蓮と帰り話してみよう。

「ふう。これからどーなっちゃうのかな…？」

- 昼休み? -

さっきの出来事を整理しようと思ったあたしはとりあえず椅子に腰かけようと思った。

その時!

「...あのおー。優紀?」

「えっ!?!」

蓮はさっき出て行っただけ...

ま、まさか!?

あたしは恐る恐るその声のした方を見た...

「...っ!?!...!?!と...も...っ」

「あー。ごめん、聞く気はなかったというか出ていくタイミング逃しちゃって...」

たしかに、さっき部屋を見た時は誰もいなかったのに...

あっ!

智がいる場所。

そこは唯一、生徒会室の中で死角になる場所...ソファの上...

そういえば、たまに寝不足だからって昼休みに寝に来てるって言うてたな…

って、問題はそこじゃない!!

「あのさあ、智。話どこから聞いてたの…?」

「あー…。男として入学?ってあたりから…かな?」

ああ。智に知られてしまった…

もうダメだ。いくら智でも…軽蔑される…

「あのさ、優紀…俺、お前が女だって知ってたよ。」

「えっ!?!」

あたしは聞き間違いをしたのではないかと思った…

「智、今、なんて…?」

「実は、そうなんじゃないかってずっと思ってた…ある時、桜川先生に聞いてみたんだ。優紀、『兄弟じゃない。』って言ってたけどやっぱ生徒会の時とか見ると生徒と先生には見えなかったし…だから…」

「……」

「ごめん。先生から事情は全部聞いたから、優紀の演技に付き合お

うって思ったし守ってやろうと思ったんだ。」

そっか…知ってたんだ。

でも、1番嘘つくのが苦しかった智でよかった…

「今まで隠しててごめんね。智にはいつか言おうとは思ってたんだけど嫌われるのが怖くて…」

「ううん。いいよ。あんな事情があつたなら責められない！それに、俺にとって優紀は親友＆パートナーだしな！生徒会長やれるのも優紀がいるからだよ！」

「…ありがとう…とも…」

あたしは、泣き出してしまった。

心に突っかかっていたものがとれた気がしたから…

しばらく時間が過ぎた。

その間、智はずっとそばにいてくれた。

「ねえ、智。いつから気付いてたの？」

「ん…楓ちゃんが転入してきてからかな…？確信持ち始めたのは学祭辺りからだけだ！」

「えっ！？」

「優紀、気付いてないかもしれないけど楓ちゃんと話してる時、女の子の顔してるよ!」

「えっ… / / /」

「それに、楓ちゃん…男でしょ!？」

「ええー!？」

今日のあたし、なんか驚いてばかりな気がする…

「ほら、俺、楓ちゃんのこと好きだったじゃん。だから、結構2人の事見てたんだよね。そしたら、楓ちゃんが男だったら全部つじつまが合うなあって思ってた。」

「じゃあ、そのあと楓の事好きって言ってたりしてたのは嘘だったの!？」

「まあ、嘘って言ったら嘘になるけど…でも、楓ちゃんほんとに女の子だったらまじ理想通りだったんだよね(笑)」

「そうだったんだ…なんか1度にいろんなことが起こって頭が混乱してるよ…」

「だろうね。でも。優紀の事も楓ちゃんのこと誰にも言わないから!それに、クラスにいるときの2人の演技は完璧だからね!俺がたまたま気付いちゃっただけだから気にしないで!」

智はやっぱり優しい…

智と友達になれてよかった…

「ありがとう…」

「でさ、俺から1つお願いがあるんだけど今度3人で会わない？変装なしで！」

「いいけど…なんで？」

「いいじゃん、いいじゃん！じゃ、今週の日曜10時に駅前な！」

「うん…」

「じゃあ、そろそろ教室戻るか！」

あたしは涙をふいて気持ちを切り替えた。

「そうだな！」

「あつ、男モードだ（笑）」

「笑うなよ！！！」

こうして、あたしたちはさらに友達として絆を深めた。

ん？なんか忘れてない…？

あー！！！！蓮…

とりあえず楓に全部話してから考えよ!!

・報告・

放課後、蓮は言っただ通りあたしを待っていた。

ただ、学校では男装に付き合ってくれてるから変な行動はとらないからよかったんだけど…

学校を出てからが…

お茶をして帰ることになったんだけど、レディーファーストってやつ？

男子服着てるからさらに恥ずかしかったんだけど、

それでもやつぱ慣れないことされるとちよつとドキドキした。

それに、蓮があたしのこと好きって意識しちゃったからかな？

あー！ダメだ！ダメだ！

あたしは楓が好きなの…はつきり言わなきゃ。

「蓮…あたしは！かれ…」

「言わないで！俺、まだ何もしてない…せめて俺の事もっと知ってからにしてっ！」

そんな顔されたら何も言えなくなるよ…

「わかった…」

「こういうわけで、蓮にちゃんと言えないままだった…」

ピピピピッ！

「あつ、こんな時間！」

「お兄ちゃんちょっと出てくる！」

「ああ。気をつけろよ！」

「うん、行ってきます！」

あたしは楓と約束した公園に向かった。

「お待たせ！」

楓はすでにそこにいた。

あたしに気付くと…いきなり抱きしめてきた…

「…っ／＼／＼楓…どうしたの？」

「俺、心配で…あいつと何もなかった？」

「うん、大丈夫。何もされてない…」

「よかった。」

楓の抱きしめる腕の力がもつと強くなった。

「楓…そんなに強くしたらお話出来ないよ／＼／？」

「あつ、ごめん…」

そういつて楓は離してくれた…

でも、あたしは楓の腕の中にすっぽり収まっていた…

「楓に話したいことがいっぱいあるの！」

「なに？あいつのこと？」

「ううん、その前に智のこと！」

「智？なんかしたのか？」

「智ね…あたしたちのこと全部知ってたよ！」

「えっ！？」

楓の顔を見ると目がまん丸になってる。

そつとう驚いてるみたい。

「あたしもビックリしたんだけどさ、早くから気付いてたみたいでお兄ちゃんにも確認してたんだって。」

「俺の事も知ってるってこと?」

「そうだよ!」

「じゃあ、あいつ知って俺に近づいてたのか!？」

「そういうこと! 智にも騙されちゃったね。」

「そうだな!!」

あたしたちは2人でしばらく笑っていた。

「そういえば、日曜日に智が遊ぼうだって! あっ、変装なしでだつてさ!」

「いいけど、あいつも変わったやつだな。」

「そうだよねー(笑)」

「そういえば、蓮のことはどうなった!？」

「...それが...」

「どうした!?! やっぱなんかされたのか?」

「ちがうの...好きだって言われて...断ろうとしたんだけど...」

「あいつ...やっぱり...」

「やっぱりって?」

「この時期に転校なんておかしいと思ってたんだよ…優紀を追ってきたとしか考えられなかったし…」

「ずっと好きだったんだって…でも、あたしは幼馴染としか思っていないし。それに、好きなのは楓だけだもん…」

「ゆうき…俺も、絶対に優紀は離すつもりはないから!だから、俺が守ってやる!」

「うん!ありがとう、楓…でも…」

「でも?」

「蓮に楓が女装してることいったら退学させられちゃうと思ってて彼は学校にはいないって言っちゃった…」

楓は少し困った顔をしている…

だよね…

「じゃあさ、俺、女として優紀にアタックするよ!」

「えっ!?!」

なんか楓がまた変な事言いだした気がするんだけど…

「そうしたら、ずっと一緒にいる口実が出来る！さすがに蓮も優紀を退学させようとは思わないだろうから邪魔されないんじゃないかな？」

「それは、そうかもだけど。うまくいくかな？」

「やってみなきゃわかんないよ！それに俺と一緒にいる時間が増えるんだよ！嬉しいでしょ！？」

「うう。それは…うれしけど…／／／」

「じゃあ、決まりな！日曜に智に会うことだし智にも協力してもうか！」

「う、うん。」

「じゃあ、体冷える前に帰るか！また、日曜に会おうな。」

「わかった。じゃあ、日曜にね！」

あたしたちはそれぞれ家路についた。

・日曜・

あたしと楓は先に待ち合わせしてから、智の待つ駅前に向かった。

駅に着くと智はもう待っていた…

「ともーお待たせ!!」

「てか、お前らおせー…よ…えっ!？」

「ん?どうしたの?」

あたしも楓も智が何に驚いてるのか全く分からなかった。

でも、智がすごい驚いてるのがこっちまで伝わってくる。

「お前ら…もしかして学祭の時の…?」

「ああ!!そうだよ、おまえ気付いてなかったのか?」

楓が意地悪そうに言った。

「ばっ…気付いてたに決まってるだろ!」

「嘘つかなくてもいいよ!なあ、優紀?」

「うん!智、正直に言っちゃいなよ!」

智は悔しそうに…

「…今、知ってビビった。あんときのお前らまじすごかったし…」

「認めたな！」

楓はなんか嬉しそう（笑

「あつ！言つとくけど優紀には惚れるなよ！俺のだから！」

「ちよつ、楓っ／＼／」

嬉しいけど、「俺の」とかまじ恥ずかしいんですけど…

するとさっきのお返しとばかりに智が…

「ええ、どーしよっかなあ？優紀、想像以上にかわいいし！」

「智、おまえなあ！」

こういうことに慣れてないから…

てか慣れてなくてもかつこいい2人にこんなこと言われたら誰だつて恥ずかしくなっちゃうよ…

「もう、2人ともやめてよ…／＼／」

「悪かったよ、優紀」

「ごめんごめん、優紀！」

そういつて2人は笑って謝ってくれた。

「で、今日はどうすんの？」

楓が智に聞いた。

「あんま考えてなかったんだよね。てか、目的は2人の私服見ることだったし！俺の目的は達成！」

「はあ？（2人）」

「まあ。まあ。とりあえず、お茶でもしながら考えよーぜ！」

そういうことで、あたしたちは近くのお店に入った。

するといきなり楓が

「智、お前に頼みがあるんだ！」

「改まってなんだよ？」

「優紀と蓮のこの間の話聞いてただろ？」

「ああ。」

「だから、俺、学校で女として優紀にアタックすることに決めたからいろいろ協力してくんない？」

「はあ？」

やっぱり…智あきれた顔してるよ…

すると智がこっちを見て…小声で

「こいつ本気で言ってるの？」

「うん。まぢ。」

「もしかして、結構バカ？」

「ああ、気付いちやった？」

「うん。」

あたしたちがこそこそ話してるのにしびれを切らした楓が

「智、優紀から離れろ！2人で何話してんだよ？俺にも聞こえるように話せよ！」

あつ、すねてる。（笑

楓はすぐに感情にだすからわかりやすいなあ。

「わりい。ただ、楓がバカ！って話し！」

「はっ！？俺がバカ？なんで？」

「気付いてないところがさらにバカだな。優紀、ほんとにこいつでいいのか？俺にする？」

「何言ってんだよ！優紀は俺のだって言っただろ！」

「はいはい。もう、やめなさい2人とも！智も、楓で遊ばないで！」

「ごめんごめん。楓の反応がおもしろくってつい。」

「俺、遊ばれてたのか！？」

楓は、今度はしょぼんとしてる。

こういうのもかわいい。

それに、楓が男同士で会話してるの見るの初めてだし…前の学校だとこんな感じだったのかな？

今日は楓のいろんな一面が見れてうれしいな。

智に感謝だね！！

「さっきの話だけど…」

智が話を戻した。

「別に俺は協力するけど、でも、お前ちゃんとうまくやれるのか？優紀はともかく、楓はなんか危なっかしい気がするんだけど…」

「大丈夫だよ！」

「ならいいけど、その自信が心配だよ…まあ。頑張れ。」

「サankyユー智！」

あたしたちはそのあと近くのゲーセンで遊んでから帰った。

そして次の日から楓のあたしに対するアタックが始まった。

やっぱり、周りのクラスメートは「あの副会長に！？」ってすごい驚いてた。

それに、蓮も楓の予想外の行動にまだ何も出来ない感じだった。

あたしとしてはよかった。

それに、楓とこんな風に話せると思ってなかったし…

- 失態 -

楓が女としてあたしにアタックし始めてから1カ月が過ぎた。

まわりははじめ驚いていた…

だって、どんなにかっこいい男子から告られても断っていた楓がまさか地味で真面目な副会長を好きになるなんて誰が思ったか！

でも、そんな周りの目を気にしない楓のアピールはだんだん知れ渡って

今や、学校中が認めるほどになってしまった。

しかも、智も楓の事はあきらめた宣言するし！

さらにさらに！

楓の応援までしちゃってるから、まわりもあの副会長も楓になら落ちるんじゃないかって興味深々だし。

だから逆に付き合うつて発表するのが嫌だったりする。

なんか負けたみたいじゃん…

というわけでまだ楓の片思いってことになってるんだけどね。

そんな空気だから今までは運は何もしてこなかった…

たぶんこれから何も起こらないんじゃないかって…

そう思っていたのはあたしただけだったのかも知れない…

―兄（慎哉）サイド―

今日は珍しい人物からの呼び出しだった…

時刻は夜7時。

この時間なら生徒も先生も大半帰宅してるからってことで生徒会室にしてもらった…

まだ、仕事があるから帰宅できないしかと言って外で会つのはめんどくさかったからだ…

それにあいつなら別にいいかなって…

「…にしても…はあ。あいつが俺に用事って今までもろくなことなかった気がするなあ…」

そう。

あいつとは蓮のことである。

あいつが昔から優紀の事を好きだったのは知ってるし、過保護だ！  
なんだ言って一方的に俺の事嫌ってるからなんか俺も苦手になってしまったのである…

それに、蓮が転校してきたのだって優紀を追って来たに違いない…

でも、1つだけ気になることがあった。

どうしてこの時期だったのか…

そんなことを考えてたらドアが開いた。

「失礼しまーす！あつ。もしかして待ちました！？」

「…いや。…で、なに？」

あいかわらず元気だな。とか思いつつさっさと話を終わらせたかった俺はいきなり本題を切りだした。

「ああ。はい！実は…優紀にまわりついてる楓って奴、あのまんまでいいんすか？」

「そんなことか、別にいいんじゃないか。2人も何か考えがあるんだろ！」

「はっ！？」

「？」

俺を見てる蓮の顔は不思議そうな顔をしている。

いかにも自分が求めている答えではなかったかのような…

俺にはどうしてこんな顔をしているのかわからなかった…

「えっ！？ちょっと待て！蓮、どうしてそんな不思議そうな顔してるんだよ？」

「だって、慎哉さんが…2人にも考えがあるって…えっ！？ってことは楓、優紀のこと知ってて？じゃあ、優紀も女に告られてまんざらでもない感じなの？」

「っばか！優紀は女には興味ないよ。だって楓は、おと…っ！？」

やっべ！さすがに今のはまずかった…

つい優紀をかばおうとして…

「慎哉さんっ！今なんて！？楓は…男って言いました！？」

「はははっ、んな訳ないじゃん！あんなかわいい子が男だなんて！空耳だって。楓ちゃんも女の子だよ！」

ああ！！だから蓮と話すのは嫌だったんだよ…

優紀、蓮には話してなかったんだな…にしてもさすがに今のはバレ

た…よな…？

「ふっ。やっぱり兄妹っすね。慎哉さんも嘘つくと優紀と同じ反応するんすね！」

「！？」

「ふっん。楓は男で、女装か…変な趣味。ふっ…慎哉さん貴重な情報ありがとうございます！じゃあ」

ボタンっ！

生徒会室のドアが勢いよく閉められた。蓮の足取りは軽く、楽しそうに…

「あいつの最初の質問の意味は…普通に優紀のことを思ってたんだろうな…ああ。ど…しやう…優紀。ごめん…」

俺は誰もいなくなった生徒会室で1人呟いた。

- 蓮 -

く  
ふ  
ふ

携帯の着信が鳴った。

「あれ？この音は？」

指定着信にしている蓮の音だった…

幼馴染ということもあって着信音は分けておいたのだ。

最近、何もしてこなかったからこの時のあたしは蓮のあの言葉を忘れていたのかもしれない…

「もしもし？」

「優紀？今から話したいことあるんだけど外に出てこれない？今、優紀んちの前にいるからさ！」

「えっ？」

部屋の窓から外を見るとこちらに向かって手を振る蓮の姿があった…

さすがに家まで来てくれるのに会わないのもどうかと思ったので仕方なく行くことにした。

「わかった。じゃあ、今から出るね…」

出来れば、2人つきりで会うことは避けたかったけど…

さすがに、外だったらいくら2人きりでも何もされないだろうし…

あたしは一応お兄ちゃんへの置手紙を残して外へ出た。

「優紀ごめんな。こんな時間に…どうしても話したいことが合って、近くに公園あったよな？公園で話そう？」

「…うん。」

あたしたちはすぐ近くの公園に向かった。

いつもはうるさいくらいなのに今日の蓮は無口だ…

少し嫌な予感がする。

そして、そういうときの感はいやってほど当たったりする…

公園に着くと自販機であつたかい飲み物を買った。近くのベンチに座った…

「お財布持ってこなかったから、ジュース代…後で返すね。」

「いいよ、いきなり誘ったのは俺だし。遠慮しないで！ねっ？」

「…うん。ありがとう…」

やっぱり秋の夜は少し冷える…

買ってもらった飲み物をカイロ代わりにすることにした…

「でさ、話なんだけど…」

蓮が重い口を開いた。

やっぱり、どこかいつもと違う蓮の様子…

今すぐにも帰りたかった…

「もしかして…優紀の彼氏って楓？」

「！？」

あたしは驚いて持っていた缶を落としてしまった…

聞き間違いだと思いたかった…でもそれはもう手遅れで…

蓮は動け出ないでいるあたしを見つめ、落としてしまった缶を拾って渡してくれた…

「ごめん。驚かすつもりじゃなかったんだけど…やっぱりそうなんだ。」

「…どう…して…？」

「楓が男だってのは分かったんだけど、彼氏っていうのは優紀に鎌をかけてみた。ごめんな。」

あたしの頭は混乱していた。

蓮にバレたこと。

どうして楓が男だってバレたのか。

そして、楓の事をバラされたら一緒にいれなくなってしまうのではないかと…

「お願い！楓が男だってみんなには内緒にしてっ…！」

あたしは必死だった…

涙が出ているのにも気づかないほどに…

「優紀っ。泣かないで…そんな顔されたら俺…」

それは一瞬だった。

腕を引かれ何が起こったか事態を把握できなかった…

そして、気付くとあたしは蓮の腕の中にいた

「イヤッ!!」

抵抗をするけど蓮はビクともしない…

中学まではまだあたしの方が強かったのに…今の蓮はあたしの知らない1人の男のような気がする…

「優紀っ!!ごめん。泣かすつもりはなかったんだ…でも。少しでもいい俺の話を聞いてほしいっ…」

蓮の必死な声にあたしはなぜか抵抗できなくなった…

「…ありがとう。…でも悔しいなあ。必死になって泣いて俺を止めるほどあいつの事が好きなんだな…」

「…」

「こっちに転校してきて…楓が女だって思っても優紀と仲良くしてるの見てちよつと妬いた…中学ま

では俺とずっと一緒だったのに。それに、楓と話してる優紀の顔は本当に楽しそうで…俺以外にそんな顔するのが悔しかった…」

「……」

「楓の事はみんなには言わない…でも、本当に少しでいいから、俺のこと見てくれないかな…？」

こんな蓮は見たことがなかった…

そして蓮の本音。

まっすぐな瞳で素直に伝えてくる蓮の言葉にあたしは頷くしかなく…

頷いたあたしをみると蓮の顔は子供のような嬉しそうな顔をして笑った。

そんな蓮を見て少しドキドキしてしまった…

「あつ！優紀、もう1つだけ…いい？」

少し遠慮がちに聞いてきた蓮は抱きしめていた腕を緩めた。

「なに？」

「…うん。ごめん、我慢できなくなった…」

そついうと、蓮は顔を近づけてた…

いきなりの事で逃げるタイミングを逃してしまったあたし…

キスは唇に…軽く触れた…

「…っ！？／／／」

「…今のは忘れていいから…」

蓮は耳まで真っ赤にして反対側を向いた。

そんな蓮を見たら怒ろうとしていたのになんだか怒れない気がした…

「じゃあ、そろそろ帰ろうか。さすがに、慎哉さんも帰って来る頃だろうしね…」

「…うん。」

蓮に家の前まで送ってもらった。

家の玄関を開けようとしたらいきなりドアが開いた…

「うわっ！」

「きゃっ！！」

ドアを開けたのはお兄ちゃんだった…

「お兄ちゃんどうしたの！？」

「あつ、イヤ。置手紙見て…それでちょっと…大丈夫だった？」

「えっ！？大丈夫って何が…？」

「えっと…」

「！？もしかして…蓮に楓の事言った！？」

そついうとお兄ちゃんの顔はみるみる青ざめていった…

「ごめん！！本当にごめん…」

本当に、悪気が合ったようには見えない。

てか、お兄ちゃんがそんなことをする人じゃないってあたしが1番分かってる。

きつと、勘違いしてついしゃべったか。蓮に上手くのせられたんだろ。

「いいよ、お兄ちゃん。あたしもちゃんと話してなかったのがいけなかったし。蓮と付き合う気がないからって逃げてたのはあたしだし…」

「ゆうきい…こんなお兄ちゃんを許してくれてありがとう…」

「ほらほら。男なんだから泣かないで!!」

「…泣いてなんかないぞ!!」

「はいはい。ご飯まだでしょ!?!温めてあげるから着替えてきて!」

「はい!」

子供のような返事をしてお兄ちゃんは部屋に向かった…

あたしはキッチンに向かいながら今日の事を思い出してしまった…

「はあ。楓には今日のこと黙っておこう…」

楓に素直に言ったら何をしでかすか分ないし…

ちよつと心苦しい気もするけど…

それに迂闊とはいえ蓮にドキドキしてしまったから正直に言えない  
って言うのもある。

楓の事が好きはずなのに…ちよつと蓮も気になったりする…

「はあ。あたしどうしちゃったんだろ…」

・ 異変 ・

俺は楓。

今、目の前で起こっていることを理解できずに教室の入り口の前で立ち止まってしまった。

さっきまで、今日は優紀とどんな話をしようかとウキウキだったのに…

今はそれどころではない…

なぜなら…

「優紀——！ここ教えて——！」

「いいよ。ここは、 $x$ にこれを代入して…ほら出来た！」

「ホントだ——！！さすが、優紀、天才！」

「褒めすぎだって…他にわかんないところは？」

「うん。コレとコレとコレと…」

「はあ？蓮、そんなに！？ちょっとは自分で勉強しろよな…」

「だって、数学嫌いなんだよー！」

というやり取りをしている優紀と蓮。

昨日までは仲良くなかったはず…やっぱり理解できない。

夜の優紀との電話では何も言っただけだったし…

「ん？」

「…っおい！楓、邪魔！」

「えっ！？あつ、智。おはよー」

「何、こんなところに突っ立って唸ってんの？」

「いや…それがさあ。あれ、見てみ？」

そう言つと智は指を刺した方を見た。

それは、俺の中では史上最高に異様な光景。いや、むしろ…

やっぱり言つのはやめと…う。

「あれれ？どうしちゃったあの2人？」

「それがさあ、わかんないんだよね」

「ああ、それでここに突っ立ってんだ。気になるなら、ほら本人にさっさと聞く！行くぞ楓！」

「あつ！ちよつと待ってよ！」

智は俺の気持ちなんか無視して優紀のもとに向かって行った…

そして単刀直入に…

「お前ら、そんなに仲良かったわけ？」

オイオイ。

本当にズバツと聞きすぎだよ…

それが逆にありがたかったりもするんだけど…

恐る恐る優紀の返事を待つと、優紀が答えるより先に蓮が口を開いた。

「てか、仲良くしてなかった方が不思議なの！俺と優紀は幼馴染なんだよ？お前らが邪魔で話し出来なかっただけだし。」

そう言い終わると、蓮は俺の方を向いてちよつと勝ち誇ったような顔をした。

はあ！？

俺の怒りのボルテージが上がった。

でも、ここは学校だ。

ましてや、俺は今、女の格好してるんだから騒ぎを起こしちゃまずい…

蓮の視線を無視して優紀に話しかけることにした…

「おはよー優紀君。」

「…おはよ。楓さん…」

えっ！？

今、優紀、俺から目逸らした？

しかも、さっきまでの元気がなくなった…

俺の頭ん中は混乱しまくりだった。

するとすぐに先生が教室に入ってきたから蓮と智は自分の席に戻った。

優紀もいつもの真面目な感じで先生の話を聞いている。

俺は携帯をとってメールした。

『なんかあった？』

返事はすぐに来た。

『何もないよ』

ただ、それだけ…

そのまま、1限目の授業が始まった。

授業が終わるとまた、蓮が優紀のところに来て話し始める。

そこに智も来て、3人で話している。

しかも、蓮と智は意外にも話が合ったようで盛り上がってる…

優紀も楽しそうに笑ってるし…

俺は、なんかその場にいたくなくて教室から出て屋上に向かった。

そして、そのまま次の授業をさぼることにした。

寝転がって青空に流れる白い雲を見つめたまま俺は眠りに着いた…

―優紀サイド―

休み時間が終わっても楓が帰ってこない…

今まで1度も授業をさぼったことがない楓がすごく心配になった。

朝から、蓮が話しかけてくるから今日はまともに楓と話をしていない…

しかも、朝。

上手く楓の顔を見れなかった…

授業が始まって30分が過ぎた。

楓に送ったメールの返事も来ない…

心配になったあたしは、この学校に来て初めて仮病を使った…

智と蓮が付き添う？と聞いてきたけど、「大丈夫！」っていった1人で教室を出た。

楓がいそうな場所が分らなくてとりあえず人があまり来なさそうな場所を探して回った。

そして、たどり着いたのは屋上だった。

普段は危険だからって理由で鍵がかかっているのに今日は開いていた。

もしかして？

って思っでゆっくりドアをあけるとそこには楓がいた。

「よかった…」

思わず。溜息とともに安堵の言葉が出た。

やっぱり、寝てても楓はキレイだった。

ウィッグの髪が顔にかかってたから取ろうとして手を伸ばしたらいきなり腕を引っ張られた。

「きゃっ！ー！」

気付くと寝転がってる楓の上で抱きしめられていた。

「…本物だ…」

「えっ！？」

「優紀の夢見てて…目開いたら優紀がいたから…」

「あたしのゆ…め…?」

あたしは顔が熱くなったのがわかった気がした。

「今日の優紀、いつもと違う…俺、嫌われたと思って…」

「えっ!? 嫌う訳ないじゃん!! あたしは…楓が好きだよ…」

「俺も、優紀が好き! ぜってー離してなんかやらない…」

「…んっ!」

あたしは楓に唇を奪われていた…

いつもの優しい感じじゃなくて何かに焦っているような…

あたしたちは体を起こして向かい合って座った…

「楓…どうしたの?」

「どうしてあいつと仲良くすんの!?」

「あいつって?」

「蓮だよ…っ」

いつもと違うのは楓だよ…

「だから、蓮も言ってたじゃん。元々、幼馴染なんだし…仲良くしてても普通でしょ？」

「そうじゃない！優紀は、俺の彼女だから…あいつと話してるのを見るとム力つく…」

「えっ！？」

「あいつは優紀の事狙ってるんだよ！それに、幼馴染だって言っても仲良くしなかったじゃん。でも、急に態度が変わった！！絶対なんかあっただろ！？」

「…それは…」

「それは？何！？」

楓に余裕がなさそうなのは見ていてわかる…

きつと今、いくら「好き」っていても気持ちは伝わらない気がする。

ちゃんと話さないとダメなんだろうなって…

でも、昨日の蓮とのキス…

忘れてって言われたけど簡単に忘れられる訳ない…

「優紀？…お願い…何があつたか正直に教えて…俺には嘘つかないで…」

「…っ!？」

今にも泣き出しそうな顔をしている楓。

楓の気持ちが痛いくらいに伝わってくる…

やっぱり、正直に話そう…

「楓。正直に話すね…でも、あたしが好きなのは本当に楓だけだから…」

「…うん。」

あたしは昨日の出来事を順を追って話した…

正直に全部。

蓮に楓のことがバレたこと、蓮の正直な気持ち。

そして、蓮に抱きしめられ、キスをされたこと、うかつにもドキドキしてしまったこと本当に全部。

「これが、昨日あったこと…」

「…」

「怒ってる？」

「怒ってる…」

「そうだよね…ごめん。嫌いになった？」

「…なんでそうなるの？俺が怒ってるのはあいつに対して…そして、優紀の事を嫌いになるわけないじゃん」

「ほんと！？」

「当たり前だろ！でも、あいつ…どうしてやるのかな？」

「えっ！？」

さっきまで、泣きそうな顔をしていたのに…

今度は怒ってる。

「とりあえず、あいつのこと」に呼んでくれない？優紀、連絡できるでしょ！？」

「あっ、うん。」

ポケットから携帯を取り出すと

ちょうど授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

- 勝負? -

ボタンッ!!

メールをしてから5分後屋上のドアが勢いよく開いた…

「なんだよ話って! ああ、俺にお前の事黙ってて欲しいってこと?」

「はっ? 別にそれはばらしたきゃばらせよ! 俺がム力ついてんのは優紀に手出してたって事だよっ!!」

そっついうや否や楓は蓮に殴りかろうとした。

「…ッやめてー!」

気付けばあたしは思いつきり叫んでいた…

あまりの剣幕に楓と蓮は驚いたようにこちらを見ていた。

「楓、さっき話した通り悪いのは蓮だけじゃない…あたしにも責任はある…だから、そっついうことはしないで…2人はあたしにとって大切な人なんだから怪我とかしてほしくない。わがままでごめん…」

あたしは思ったことをすべて言った。

楓はその言葉を受けて振り上げていた拳をおろしてくれた。

でも…

「あーくっそ！でも、このままじゃすつきりしねえ。なあ蓮。俺に提案がある」

「はあ？内容次第だな！」

「来週ある葉山体会で俺が勝ったら優紀を諦める！」

葉山体会とは男女混合のマラソン大会…

葉山学園に昔から伝わる伝統の大会で距離は5 Km。

蓮はサッカー部のエースを務めてたくらいだから足はめちゃくちゃ速い…

楓からはスポーツ系の話はあまり聞いたことはない…言いだしたくらいだから自信はあるんだろうけど、でも蓮相手に…

「あつ…楓…はつ。おもしれーじゃん。ただ、俺が勝ったらお前はどつすんの？」

先に蓮に遮られてしまった…

「俺が負けたら、みんなの前で『男』だって言うよ!」

「えっ!?!」

「交渉成立。お前を負かしてここから去ってもらっからな!覚悟しとけ!」

「俺が負けるわけねーだろ!」

そう言って蓮は戻って行った。

「ちょ、ちょっと待ってよ!楓そんなことしたら…」

「優紀は俺が負けると思ってたんの?」

「そんなことないけど…ただ…」

「ただ何?優紀は俺だけを信じて。絶対に負けないし、離さないって言っただろ。なっ?」

「…うん。」

「素直でよろしい。」

そんな笑顔で自信満々に言われたら楓を信じるに決まってるじゃん。  
でも、楓がここからいなくなったらあたし…どうしょ…

なのに…そんなあたしの心配をよそに楓がさ…こんなこと言うんだもん。

「なあ、優紀せっかくだしこのままどっか行かね？」

「ええ！？ダメだよ！あたし仮病つかってココ来てるんだからね。」

「まぢ！？だよな…真面目な副会長がさぼったなんてばれたら一大事だ（笑）」

「もう。今度から心配してあげない！！」

「あつ。ごめんって。」

「ふーんだ！」

「優紀様ごめんってー」

明るく振る舞えたかな？

この勝負、負けたら楓は…結果的にこの学校からいなくなる。

さすがに生徒や先生にばれたらどう言っても残ることは難しいだろ

うから…

あたしに出来る事…

楓を信じる。

— 楓サイド —

俺らは結局3限目もさぼった。

蓮との話の後、俺を信じるとは言ったけど、

優紀はやっぱりどこか不安げな表情をしていた…

だよな…

さすがに今さら『男』でしたって言ったらこの学校にはいれないだろうし…

なんだかんだでこの学校は結構楽しい。

それに優紀と離れるのは絶対に嫌だ！

優紀、この勝負絶対に負けないからな！！俺は心の中で誓った。

- 勝負? -

葉山体会、当日。

「はあ。こっちが緊張する…」

横には俺以上に緊張している優紀がいた。

それもそうだよな…

この勝負に負けたら俺はこの学校からいなくなる…

「ふんつ。よく逃げ出さなかったな。」

まだ嫌味としか言いようがない満面の笑みを浮かべて蓮が話しかけてきた。

「はっ、それはこっちのセリフだ。俺をなめると痛い目あつぞ!」

「おもしろい。それくらいじゃなきゃつまらないしな。今日でケリをつけてやる!」

「のぞむところだ!」

「もう、2人ともやめてよ！！楓も少しは周りに気をつけてしゃべってよ！」

「あつ、わりい……」

優紀が少し控え目ではあったがすごい形相で俺らを止めた。

やっぱり俺らはどうしても優紀には逆らえないらしい……

それに、周りを見回すと離れてはいるが色んな奴らがこちらを見ている。

ヤベエ……

さすがに離れてても危なかった。

優紀サンキュー！

そうこうしているうちにスタートの時刻だ……

「楓、頑張ってね……」

すくく心配そうな優紀。

「うん。大丈夫、信じて待ってて」

「わかった」

俺はスタートラインに立った。

「位置について、よーい……」

パンッ！！

晴れた空に響き渡るようにピストルの音が鳴り響いた…

俺は勢いよく飛び出した。

しばらくすると俺は先頭を走っていた。

後ろはかなり離れてる。

昔から走るのは得意だったし、陸部から勧誘されるくらい俺は速かった…

なのに…

「まちかよ……」

俺の横にはぴったりと蓮がいる。

そついや自信ありげだったもんな…

「あれ？もうばてちゃったの？」

うわぁ。またあの笑顔。

腹立つ！！

「んな訳ねーじゃん。お前こそ、ばててんじゃねーの？」

「てめえの目は節穴か？誰がばててるって？」

「うつ…」

確かに、蓮は息も乱れていない…一定の呼吸を刻んでいた。

まだ、ヤバいかも…？

そのとき…

「なあ、楓。」

「なんだよ！？」

「1つ聞きたいことがあるんだけど…なんで優紀だったの？」

「はっ！？どういう意味？」

一体何を聞きたいのか俺は理解できなかった。

「わざわざ、女装してまでこの学校来て。なんで好きになったのが優紀だったわけ？てか、そもそもなんで女装なんか…」

「ああ、優紀から聞いてなかったんだ。女装してたのは単に前の学校がつまんなさすぎたから、刺激を求めてって感じかな？そんだけ。」

「…」

うわぁ、その目。

分かってるよ、自分が言ってることがおかしいくらい。

でも、それでも俺はこの学校に来てよかったって思ってるんだって…

「優紀に興味を持ったのはあいつが兄貴と話してるのをたまたま聞いたから。ただ、からかってやろうと思ったんだけど、優紀のこと知るうちに気付いたら好きになってた。それにあいつの苦し

みから救ってやりたいと思った…」

「ってことは、中学の時の話知ってるんだ…」

「ああ、ただ優紀が思い出すの辛そうだったから詳しくは知らないけどな。蓮、お前がいながらどうして優紀はあそこまで追い詰められたんだ…？」

俺は優紀に聞けなかったことを蓮に聞いた。

この話をした時の優紀は何かに怯え、体が強ばっていた…

だから、初めてこの話を聞いたとき以降もう2度と優紀には聞かないって決めたんだ。

「それは…」

ん？蓮の表情が変わった…

「なんだよ？」

「…お前は優紀からどう聞いたの？」

「クラスのリーダー的な女子が好きだった男子と仲が良くてそれを妬まれてって…」

「ああ、その通りだ。ただその男子つてのが…実は…俺なんだよね」

「えっ！？でも、優紀はお前だけは味方だったって…」

まさかの展開だった…

「そうだ！！だから俺は言ったんだ！優紀とは幼馴染なだけで何も無いって…けどその女の子は思い込みが激しくてわがままで、しかも国会議員の娘とかで誰もそいつには逆らえなかった。先生までも…俺が優紀をかばうといじめはさらにエスカレートしてった…しかも俺が見てない隙を狙って…だから俺は…ッ」

「もういい！！それ以上は…」

でも、蓮は話をやめなかった…

「…確かに味方だった。でも俺が守ることでさらに優紀を苦しめることを悔やんだ…自分のせいで明るかった優紀が変わっていくのを見るのが辛くて優紀から離れた。それでも、優紀は俺を責めなかったそれどころか今までどおりに接してくれた…」

「…」

「だから、高校は離れたけど優紀を前みたいに戻すのは自分だっと思ってた…それにずっと好きだったからな。なのに、久々に会った優紀は昔のようだった。いや。むしろそのとき以上にいい顔をして

た…」

「…」

「…でその理由を知りたくなって俺は転校してきた。これが真相。」

俺はなんて言っていないか分らなかった。

「あつ…えつと…」

「いいよ、無理して何か言わなくても…それに分かったこともあるしな」

「分かったこと？」

「ああ、優紀が変われたのはお前のおかげだ…だから、優紀からお前を奪うことはまた優紀を苦しめることになる…だから…優紀のことはお前に任せる。俺は今まで通り幼馴染のままだ！」

「えっ！？…いいのか？」

「ああ、あの条件は取り消しだ！」

俺が想像もしなかった展開になってしまった…

でも、これで優紀を悲しませることはなくなった…

「…蓮、サンキューな…／／／」

少し照れくさいけど礼を言った。

「あつ！ただ、条件はなくなったけどマラソン勝負は続けるぞ！楓、お前は俺のライバルだしな（笑）」

「あつたりめーだ！勝負は勝負だ！」

結構、話しながら走っていたらしくゴールが見え始めていた。

俺と蓮は楽しむようにゴールに向かって行った…

勝敗は…

「同着！！」

ゴールにいたタイム係から告げられたのはこの言葉だった…

「はあ、はあ…やるな、蓮…」

「はあ、はあ…楓もね…」

最後、全力で走ったのに蓮はやっぱ振りきれなかった。

さすが、俺のライバルだ…

「楓？大丈夫？」

そう声をかけてきたのは優紀だった…

思わず抱きしめなくなったのをすっげえ我慢した。

「大丈夫だよ。…それとあの条件は無くなったから…」

「えっ!？」

優紀は目をまん丸くして驚いている。

あたりまえだよな…

すっげえ、心配して待ってたのに帰ってきたら無くなったって言われたら誰だってそうなるよな。

「あとで、ちゃんと話すから…帰り一緒に帰ろ？」

「…うん。」

—優紀サイド—

レースから帰って来た楓から条件は無くなったなんて言われてあたしは喜んでいいのかちょっと複雑だった…

確かに、楓のことがばれる心配はなくなったわけだし…

でも、どういいうきさつでこうなったのか理解できない。

しかも、ケンカ調ではあるが2人とも仲良くなってるし…

もう、訳わかんない！！

なんか振り回されてる感じがする！！

「もう、帰りに楓からみっちり聞きだしてやる！」

—帰り道。

「…でどうしてこうなったのか教えて？」

帰りまでの時間が長く感じて楓に会うなり聞いてしまった。

「ん〜？簡単に言つと、走ってる最中に話してて…気づいたら解決しちゃった。」

「えっ！？それだけ？」

「そうだよ！」

色々、考えてたのに…それだけなの！？

「本当に！？なんか隠してるでしょ？」

「何も隠してないよ〜！まあ、1つあるとしたら2人とも優紀のことが好きすぎたってとこだな！」

「…っ／／／」

思わず赤面してしまった。

なんかこれ以上聞いても恥ずかしくなることしか言わなそう…

「あつれ〜？優紀どうしたの？」

「…どうもしないもん!」

結局、詳しいことは聞き出せないまま帰宅した。

でも、本当に楓がいなくななくてよかった…

- 危機 - (前書き)

すでにこの話を読んだ方に『お詫び』です。  
読んでいない方はそのまま読んでください。

最後の方にありました、楓サイドのお話ですが今後の話の展開のため内容を少し変更させていただきました。申し訳ありません。今後はこのような事がないように話をきちんと練ってから投稿したいと思います。

これからも『クローバー』をよろしくお願いします。

- 危機 -

あの勝負が終わってからの日常はすごい穏やかだった…

楓と蓮もケンカしつつも仲よさげだし、それに智も加わって人生で1番楽しい時間を過ごしているかもしれない。

そして、あたしと楓はとうとう『付き合う』宣言をしたのだ！

そんな大袈裟じゃないんだけどね…

とりあえず、聞かれたら付き合ってるって言うことにしたんだけど…噂ってすごいな…1人に言ったらその日のうちに広まっちゃった。

それも、たぶん学校1の美女の『楓』の事だからだろうけど（笑）

そんな日が続いたある日。

先生から1冊のしおりが渡された…

それは…

『修学旅行のしおり』

…？

そういえば！！12月にあるのすっかり忘れてた…

勝負とかでそれどころじゃなかったから…

今年は2泊3日で京都・奈良に行くことになっている。

そして、しおりを開くまであたしはあることを忘れていたのだ。

「ん〜？」

あたしは、しおりを開いたまま悩んでいた。

「どうしたの優紀君。」

不思議そうな顔をした楓が隣から声をかけてきた…

「それがさ。部屋割り見てたんだけど見つけれなくて…」

「えっ？あるじゃん！優紀君どこ見てるの？ほら」

そっいつて楓に示されたところをみると…

「ーッ！？」

思わず教室だということを忘れて大声を上げそうになって口を抑えた。

楓の示すしおりをよく見ると…

「えっ！？男…子…部…屋…？」

ああー……

そうでした…あたし、桜川優紀は『男装』してるんです。つい浮かれてすっかりそのことを忘れていたあたしのテンションはガタ落ちだった…。

むしろ修学旅行にさえ行きたくなくなってきた。

「楓さん…昼、生徒会室来てくれない…？」

あたしのこの胸の内の叫びを分かってくれるのは楓だけだと思ったのに…  
帰って来た返事はいつもと変わらない…満面の笑み。

「うん。いいよ！」

なんで、楓はそんな普通なんだろう？  
こっちは不安でいっぱいだって言うのに…

―昼休み。

あたしたちは生徒会室に来ていた。  
そして、途中お兄ちゃんを見つけたから無理やり連れてきた。

「はあ…」

あたしは部屋に入るなり大きなため息をついた。  
そんな様子を見たお兄ちゃんも心配そうだった。

「優紀、どうしたんだよ…楓、何か知ってる？」

「ああ、たぶん。修学旅行の事だと思います…」

「そういえば、今日しおりが配られたんだよね？」

2人はあたしの気持ちを知らずか普通に話をしている…

何があたしを落ち込ませてるのかなんて全く見当が付いていないようだし。

「てか、楓はなんでそんな普通なの！？」

「いや。むしろ優紀は何をそんなに凹んでんの？」

やっぱり…

「…だつてさあ。いくら男装してたつて男だらけの部屋で寝泊まりするなんて…それにお風呂だつてどうしたらいいの…？」

「「ッ！？」」

楓とお兄ちゃんは同じように驚き固まっている…

「もしかして、2人とも気付いてなかったの？さすがに楓はちょっとくらいは気付いてたと思ってたけど…」

「あーいや。気づいて…なかった…。」

「ゆ、ゆう…きが！男と…寝泊まり？…ゆるさーん！！」

お、お兄ちゃん…

とりあえず、気付いたらしい2人はそれぞれに何か呟いている。

「それに…楓が…他の女の子たちと…一緒にいるの…なんかヤダ…」

「えっ！？優紀？それって…やきもち？」

小さな声で言ったと思ったのに楓には聞こえてたみたい。  
は、恥ずかしい…

「ち、ちがうもん／＼／」

「優紀、顔真っ赤ー！！素直な優紀かわいいー」

「もう、楓のバカ」

このやり取りを1人冷静に見ている人物を忘れていた…

「おい！なに、いちやついてんだお前ら！お兄ちゃんキレるぞ！」

「お、お兄ちゃん！？い、いちやついてないよー！！！」

「慎哉さん！？す、すいません！」

「…で、さっきの話だけどどうすんだ？」

そういえば、修学旅行のこと…

「仕方ないなあ、お前らに朗報だ！」

「「え、なにになに？？」」

「俺ら、教員は1人部屋だし、部屋にシャワーついてるからそれ使え！さすがに、寝る場所はそのまんまだけどシャワーだけでも使えれば充分だろ？」

「うん！お兄ちゃんありがとう」

「ありがとうございます！」

「でもなあ……」

どうしたんだろう？

せっかく、少しは解決したはずなのにうかない顔のお兄ちゃん……

「どうしたのお兄ちゃん？」

「やっぱり……優紀が男部屋で寝るのは嫌だ——！そだ！お兄ちゃんと寝るか？」

「慎哉さんそれずるいつす！だったら俺も！」

「楓はダメだ！お前、優紀の寝込み襲うつもりだろ？」

「なっ／＼んなことする訳ないじゃないですか！？」

「2人とも何でもめてんの／＼お兄ちゃん気持ちは嬉しいけど、大丈夫だよ！それに智も蓮も同じ部屋だから！」

「……いや、それが危ないんだけどな……」

「え？何？聞こえないよ！？」

「んっ。なんでもない！」

変なお兄ちゃん。

でも、これで修学旅行も楽しめそうだな。

「じゃあ、お兄ちゃんありがとう。教室戻るね！楓も、戻るでしょ？」

「いや、先行ってて！楓、ちょっといいか？」

そう言ったのはお兄ちゃんだった。

「じゃあ、先行ってるよー！」

「おお！」

あたしは一足先に教室に戻った。

――楓サイド――

優紀は先に教室に戻った…

「慎哉さん、なんですか？」

「お前ら、付き合ってるって宣言したらしいけど大丈夫なのか？」

そのことが…

「まあ、2人で決めたことなんで大丈夫ですよ！いざとなったら俺が優紀を守ります！」

「なら、いいんだけど。優紀を泣かせるんじゃないぞ」

「はいっ！！」

「話はそれだけだ、何かあったら俺に相談しろ！それから、修学旅行楽しめよ！じゃ。」

やっぱ、心配だよな…

蓮が昔の優紀に戻ったって言ってたけど優紀の心の傷が癒えたかどうかなんて本人以外には分かるはずもねーもんな…

俺が絶対優紀を守る！必ず…

・修学旅行・

「ん、やつとついた京都！疲れたね、優紀君！」

「ああ、そうだね。楓さん」

そう。今日から修学旅行。

今は全員で団体行動であたしと楓は同じ班。さらに、智と蓮も一緒だから、智と蓮にお願いして楓と2人で見て回ってただけど…

「おっ！副会長と楓ちゃんラブラブだね〜！」

「副会長羨ましいぜ！」

「みんな、もうやめてよ！！ね、優紀君。」

「う、うん！」

いつのまにかあたしたちの事はほとんどの人が知っててよく声をかけられる。

恥ずかしいけど…ちょっと嬉しかったりする。

だって…

学校モードだけど、こんな会話する日が来るなんて夢にも思わなかったから…

キャッ！

いきなり楓が立ち止まってそれにぶつかってしまった。

「どうしたの？ 楓さん？」

立ち止まった楓の指の刺す方には…

「おみくじ…引いてみない？」

「…えっ！？ いいけど…」

おみくじかあ…

「あれ、優紀君おみくじ嫌いなのか？」

嫌いってか…

あたしはおみくじを引いて今まで『凶』か『大凶』しか引いたことがないのだ…

だからって悪いことが必ず起こるって訳じゃないんだけど、やっぱ出来れば『大吉』とかがいいじゃん？

「あんまり、気が進まないならやめとこっか？」

せつかく楓が引こうつて言ってくれたんだし、  
それにそろそろ運が巡ってきてるかもしれないしね…

「ううん！大丈夫！引こう！」

「うん！」

それに楓と一緒にならいい気がする！！  
よっし！コレだ！！

「…あっ！うつそ…」

「ん？優紀君どうしたの？…凶とか？」

「楓さん…これ…」

なんとあたしの引いたおみくじは…

『大吉！！』

生まれて初めて自分が引いたおみくじで大吉を見た…

「う、うれしい…」

「優紀君、すごいじゃん！じゃあ、あたしは…あつ！」

「えっ？なにになに？」

「あたしも『大吉』だ！なんか、あたしたちいいことがありそうだね。」

「うん。そうだね！」

初めて出来た彼氏と一緒に引いた、おみくじ。

『大吉』だって喜んでたのに…

まさか、あんなことが起こるなんて思ってもみなかった…

おみくじを引いた後は、智たちと合流して一緒に回っていた。

「そろそろ、集合時間だね！」

一応、この班の班長ってことになってるあたしは集合時間をみんなに告げた。

「だね！んじゃ戻るか！」

その時…

「あつれ〜？蓮じゃん？久しぶりー元気にしてたー？」

えっ！？

あたしの脳裏にあの時の記憶が蘇った…

『死ね！！』

その言葉を発したのと同じ声。

でも、こんなところにいるはずない…

一瞬、目の前が真っ暗になった。

とりあえずこの場から逃げなきゃ…とっさにそう思った。

「おお…沙奈美…久しぶり…」

蓮は少し気まずそうに答えた。

うそっ… やっぱり…

蓮が口にしたその名前「沙奈美」 中学の時のあの主犯。

あたしは蓮たちに背を向け沙奈美に気付かれないように離れようとした…  
なのに…

「優紀！？どうしたの！？」

智があたしの様子に気づき声をかけてくれた…  
でも…

「えっ！？優紀！？」

沙奈美は『優紀』という名前に反応したらしくあたりを見回しているようだ。

智は心配してくれてるようだったけど、今のあたしにそれに答える余裕はなくて、それに気付いた蓮が上手く智をつれて話をそらしてくれたようだ。

沙奈美が気付いていない隙にあたしは楓に必死に伝えようと…  
楓の制服の裾を引っ張ると楓はあたしの異変に気づいたくれた。

「あ…の子…中学の…時の…」

楓は一瞬で悟ってくれたらしく…

驚いていたけど、あたしを連れてその場から離れてくれた…

後ろで蓮たちと沙奈美のやりとりが聞こえた気がしたけどそれどころじゃなかった…

―楓サイド―

とりあえず、集合場所に向かった俺らは先生に優紀の体調が良くないことを告げ先にバスに乗せてもらった。

「優紀、大丈夫？」

「…ん、大丈夫…」

大丈夫って言うてる優紀の顔は全然大丈夫そうじゃない…

まだ、顔は青いし手は震えてる…

やっぱり、優紀の心の傷は癒えてはいなかった…

「優紀、俺がいる。俺は絶対優紀を守るから…」

俺は優紀を抱きしめ言い聞かせるように言った…

「…ん。」

そういつと、優紀の肩の力が抜けたようだった…

「そういえば…さっき慎哉さんが…『今日は俺の部屋使え』だって俺も、一緒にいるから…」

「…うん。」

俺たちは、ホテルについて慎哉さんの部屋に向かった。この頃には、優紀は落ち着きを取り戻してはいた…と、思っていたのは俺だけだったのかもしれない…

コンコン！

「ああ、入れ。」

そう言われ俺たちは部屋の中に入った。部屋に入るなり慎哉さんは優紀を抱きしめた…

「また、辛い時に一緒にいてやらなくてごめんな…」

慎哉さんの表情は本当に辛そうで…

前に、優紀を守れなかったことを本当に後悔していたんだと思う…

「大丈夫だよ…お兄ちゃん。それに…今回は楓が…っ…いい…て…  
くれ…たからっ！」

優紀は泣きだしてしまった…

きつとここまで我慢してたんだな。

みんながいる手前、素の自分は見せられなかった訳だし…

俺は本当の優紀の辛さを分かっていなかったのかもしれない…

自分の無力さが悔しかった。

慎哉さんは優紀から離れると、食べ物をもらってくると行って部屋  
を出て行った。

出ていく間際、俺に『今の優紀には自分より楓の方がいい』って言  
って…

俺はまだ泣いている優紀のそばに行き、力いっぱい抱きしめた。

「…楓、痛いよ…」

そう言って見上げた優紀の顔には少し笑顔が戻っていた。

「やっぱり…優紀には笑顔が似合うな…」

「…ありがとう。楓…」

「…ん？」

「やっぱり…昔の事思い出すと苦しいし辛いけど…楓がいるって思ったら昔より辛くなかった…楓、ありがとう。」

「そっか…俺は一生優紀の味方だ…約束な。あと、これ。本当は後で渡すつもりだったんだけど…」

俺は優紀の首にクローバーのネックレスをつけてあげた。  
俺たちを繋いでくれた『クローバー』

「これで、俺らはずっと一緒だ。辛いこともこれから2人で乗り越えていこうな。」

「うん。ありがとう楓っ／＼／」

その後、俺たちは慎哉さんが持ってきてくれた夕食を食べ、眠りに着いた。

ベツトは優紀が使って、俺は床で慎哉さんがソファァー…

その後の修学旅行は無事に終わった。

あの沙奈美ってやつのは蓮が上手くやってくれたらしく、波乱の修学旅行は幕を閉じた。

・卒業・

月日は流れ、あたしたちは3年生になっていた…

あたしと楓は同じ大学に行くことにした。

あたしは、医学部。楓は経済学部。

だから、3年のほとんどは勉強に費やしていた。

楓は、ちょっと勉強に問題ありだったから…お兄ちゃんにも手伝ってもらった。

合格発表当日。

「ああー、緊張するー」

「俺も…あんなに勉強したのに手ごたえなかったもんなあ…」

「あたしもお…」

2人ともやれるだけやったんだけどやっぱりこういつ時ってかなり緊張する…

合格発表が貼られている掲示板の前に近づくと歓喜と落胆の声どちらも聞こえてくる…

「着いちゃったね…」

「ああ…」

「せーので見ようね…」

「ああ」

「いくよ…」「せーの」「

バツ!!

あたしは勢いよく顔をあげた…

あたしの受験番号は『3428』

「さんぜん…よんひゃく……よん…」

「あつー………!!」

「な、なに!？」

横からの楓の大声であたしは自分の番号を見失ってしまった…

「ゆ、ゆーきー!!俺、あつたよ!!!!見て、見て、見て!!!!ほらっ!!」

そういつて楓が指さした方には確かに…

『1526』

楓の受験番号があった。

「楓ー！やったねー！おめでとうー！！」

「ありがとうー！！優紀はどーだったっ！？」

「あっ、まだ見つけてない…」

楓が合格してたことで危なく忘れるところだった…

「そっか、えっと…『3428』だな！」

「うっ、うん…」

再び自分の番号を探す。

「さんぜん…よんひやく…よんひやく…にじゅう…」

3  
4  
1  
8

3  
4  
2  
3

3  
4  
2  
4

3  
4  
2  
8

• •

!!!!!!

「あつたー!!!」

「うつそ、信じられない!!」

「すげーじゃん、優紀ー!!」

ギュー!!

楓に思いっきり抱きしめられた!!

「か、楓! 苦しい…」

「あつ、わりい。興奮しすぎた(笑)」

「ううん。あたしも嬉しいし…//」

まさか、あたしも受かっと思ってなかった。

楓と一緒に頑張れたおかげかなww

「2人とも合格ってことはあとはアレだけだな…」

「うん。アレだけだね!」

卒業式当日。

式が終わり、今は、先生からの最後の言葉。

「……これで、私の最後のHRになります。みなさん卒業おめでとうございます!これで、解散となりますが最後に何か言いたいことがある人はいますか?」

「はい!」

手を挙げたのはあたしと楓。

「なんだ?2人で…じゃあどっちからでもいいがどっちからにする

「？」

先に答えたのは楓だった。

「いえ。それぞれからじゃなくて2人からです。」

楓がこっちを向いて目で合図をしてきた…

あたしは頷いた。

「そうなのか？じゃあ、2人とも前に…」

「はい」「」

「なんだ、なんだ？まさか、結婚宣言！？」

周りからからかう声も聞こえてきたが、あたしたちの真剣な表情が違つと察したようだった…

そして、楓と共に教壇に向かった。

呼吸を整え…

「まずは、みなさん卒業おめでとございます。今から、みなさんに大事なお話があります。」

「副会長？なに？」

すると楓が答えた。

「僕たちは…性別を偽ってこの学校に通っていましたが…僕は本当は『男』です」

「私は…『女』なんです。今まで、黙っていてごめんなさい…」

「……………」

クラスみんなは言葉を失っていた。

「あー。先生から一言いいか。こいつらにも理由があるんだ。特に桜川には…」

先生がフォローしてくれた。

でも…

「けどよ…騙してたことには変わりねーじゃん。理由、教えてくれないのか…？」

「そうだ！そうだ！」

教室は一瞬にして騒然となった。

「は、話します！！」

あたしはとっさに答えた…

「……………」

「私は…中学の頃、クラスでいじめられていました…理由は本当些細なことだったんです…いじめはどんどんエスカレートしていき…つ…わたしは…」

目の前が一瞬暗くなってあたしの体はグラついた…

教壇に手をつきなんとか倒れずには済んだけど…

「優紀、大丈夫か！？」

昔のことを思い出すとどうしても具合が悪くなるらしく…

楓が心配そうな顔であたしの顔を見つめている…

「大丈夫…。…そして、わたしは…命を落としかけました…。…そして、人、特に女子に対して恐怖症になってしまったわたしは高校に行くのを悩みました…。…その時、兄からこの学園に来ることを勧められました。この学園にいる桜川先生は私の兄です。兄がその時、男装して入学することを提案してくれました。そうすれば、女の子と関わることが少なくなると…。…これがわたしが男装していた理由です…。…」

「……」

クラスの誰も何も言わなかった…

「上木、お前は？」

そう言ったのは…先生だった。

楓は、ウィッグを外した…

みんなは驚いた顔をしている…

「俺は、初めは単なる好奇心だったんです。前の学校がつまらなくて…それで女装して転校したら面白いだろうって…でも、優紀が男装していることを知り、そして理由も知りました。そしたら、自分がこんな事してるのが恥ずかしくなった。だから、早くにみんなに話そうとも思っただけ…俺の事を話して、もし優紀のことまでバレたらって考えたと言えなくなって今日までみんなを騙すことになってしまいました。本当にすいませんでした…」

クラスのみんなは複雑そうな顔をしていた…

「俺から一言いい？」

智だ…

「俺は、途中で優紀が女だったことを知った。初めは裏切られたってか…騙されてた事に正直腹が立ったこともあった…けど、みんな優紀の気持ちを考えてやってくれ！いくら男装してたからって言うっ

ても、結局はこの学校にも女子はいる…優紀は男装したけど、でも逃げないで1人で戦ってたんだ…そして、それを支えたのは楓だ。楓が来てからの優紀はみんなが知っての通り変わってったろ？」

「まあ、確かに…入学当初よりは話しやすくなったし…明るくなったよな？」

「俺からもいいかな？」

今度は、蓮だ…

「俺は優紀とずっと幼馴染をやってる…中学の時のいじめには俺にも原因はあるから、優紀を追ってこの学校に来た。でも、すでに、優紀は昔を取り戻し始めてた…楓のおかげだ。確かに、騙されたって感じはするだろうけど2人を責めないでやってくれ…」

「智、蓮…ありがとう…」

心の底から嬉しかった…

あたしはいい友達に巡り合えた…

「ねえ…どうして話そうと思ったの！？もう卒業だし…別に言わなくてもよかったんじゃない!？」

確かにそうだ…

でも…

「男装してた以上ずっと隠し通すつもりだったよ…卒業したらみんなとも関わらないつもりだったから極力、人と付き合つのを避けてきた…けど、あたしは…このクラスが…みんなのことが好きになったから…嘘ついたままなんて嫌だった…」

「俺もだよ！このクラスの奴らはすっげえいい奴ばっかだ…だから、2人で相談して決めたんだ…」

「……………」

口を開いたのは智だった…

「みんな、今の2人の気持ちは嘘じゃないってわかるよな！？俺らずっとこのクラスで見てきたじゃん…性別は偽ってたかみけど、その他は何も嘘ついてないんだよ！だから、許してやってほしい…」

「智…」

「俺…許すよ…2人とも大好きだし…」

「私も…」

「俺も…」

えっ！？

1人の子に続きクラスのみんなが…

「み…んな…あり…がとう…」

あたしはとうとう泣き出してしまった。

悲しいんじゃない…嬉しいの…

許してもらえるなんて思ってたから…

「副会長―泣かないで―!」

「そっだよー!!」

みんなから優しい声かけられる…

「あたし…このクラスで…よかった…みんな…大好き―!」

「優紀、よかったな…」

頭をなでながらそう言った楓も…

泣いてるじゃん…

「楓、泣いてる…」

「うつそ！？…あつ、ほんとだ…」

「楓ちゃんまで泣くなよー！！てか、ちゃん付けじゃダメかー！」

そう言っているとクラスに笑いが起きた。

あたしと、楓の気持ちはみんなに伝わったみたい…

これで心残りなく卒業が出来る…

みんな…本当に…ありがとう…

「わたしたちの話は以上です…」

こうして、長い高校3年間は終わった…

楓と出会い。

大きく変わった人生…

あたしはこれからも楓と共に同じ道を歩いていく…そう決めた瞬間だった。

「完」

## ・卒業・（後書き）

以上で『クローバー』完結です。

最後、時間が一気に飛んでしまいましたでしたが私の力不足です。

今後もちよつとずつ『クローバー』でのショートストーリーなど書けたらいいなと思っています。

最後まで読んでくださったみなさま本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4884p/>

---

クローバー・2

2011年2月17日12時24分発行